

## 生誕 300 年記念 池大雅 —陽光の三水

出光美術館(丸の内3) 24.02.10~03.24

「池大雅」(いけのたいが)(1723~76)は、「伊藤若冲」「円山応挙」らの日本美術を変革する個性的な画家たちが輩出されて、百花繚乱の様相を呈した江戸時代中期の京都画壇の中で「与謝蕪村」とともに「南画の大成者」といわれ、中国絵画の新様式をもとに独自の画風を確立して一世を風靡した。

画伯は、幼少時から神童としてその名を知られ、当時中国から新たに紹介をされた文人文化に深い憧れをいだき、かの地の絵画を展覧とした作品を数多く描いている。彼は、自然の光の中で描くことで培った抜群の四季彩感覚とおおらかな筆致に、こよなく愛した旅で得た経験によって、本場中国とは異なる日本人の感性に合致した独自の文人画をつくりあげた。



池大雅 《楼閣山水図屏風》 6曲1双 紙本金地著色 18世紀 国宝

画伯は、中国渡航の経験はないが、当時の新しい中国文化に憧れた画家の一人で、「明」や「清」時代の「南宗画(なんしゅうが)」と呼ばれたスタイルの絵画に影響を受けて、憧れの世界を想像力で描いた作品である。

絵画は、「清」時代の中国で描かれた画帳の中の2図をもとに描かれたもので、景色のよいことで有名な中国の二つの場所を左右それぞれに描いた屏風で、右には湖を望む「岳陽楼」が、左には山の中にある「酔翁亭(すいようてい)」が描かれて、建物の上には人々が集まって素晴らしい景色の中で優雅な時を過している様子である。金箔を貼った地に、黒や透明感のある淡いグリーンで、豪華に風景を描き、群青、朱、緑青などの濃い色を随所にアクセントとして使われている。